




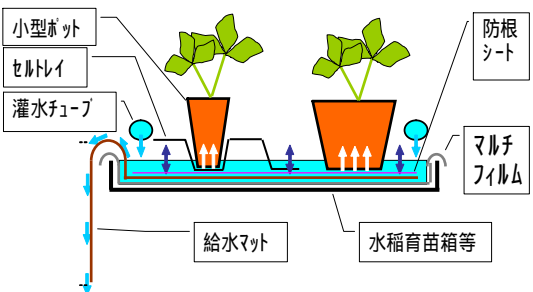




2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 夏秋果菜類の管理</p>	<p>本年のトマト、キュウリ、ナス等の夏秋果菜類の生育は、植付け後平年に比べ気温が低くやや遅れ気味であったが、6月下旬の高温でやや持ち直している。</p> <p>平成23年6月24日発表の高松地方気象台発表の1か月予報によると、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、後半は平年に比べ晴れの日が多くなり、気温は高い確率が50%、降水量と日照時間は平年並、または高い確率が40%となっている。</p> <p>天候不順が続く場合は、露地野菜では湛水による根傷みやその後の強い日射による萎れ等が起こりやすい。</p> <p>さらに、梅雨明け後は気温の急激な上昇や土壤の乾燥等による草勢の低下や生理障害等が発生しやすいため、以下の点に留意する。</p> <p>夏秋果菜類の管理 イチゴの炭疽病防除 イチゴ高設栽培の培地消毒 太陽熱利用による土壤消毒法</p> <p>ア 圃場の排水対策</p> <p>果菜類の根は一般に酸素要求量が多く、降雨が続く土壤水分過多になると気相率が少なくなり根の活力が低下しやすい。また、梅雨の終盤には強い雨が降ることが多く、圃場の排水が悪いと畝が湛水し、湿害の原因となる。このため、畝間や圃場の周辺を点検し、雨水が速やかに排水できるよう整備する。</p>  <p>写真1 排水溝が整備されたナス圃場</p> <p>イ 敷きワラによる地温抑制</p> <p>梅雨明け後は日射量が増大し、高温・乾燥状態が続くため、敷きワラを行い地温の上昇を防ぐ。</p> <p>早い作型のキュウリでは、茎葉が繁茂しているため、株元に直射日光が当たらず比較的地温は上がりにくい。定植直後のキュウリでは畝に直射日光が当たり地温が上昇しやすい。敷きワラの効果が大きい。</p> <p>地温の上昇抑制を狙いとした敷きワラを行う場合、ワラの厚さはおおむね5cm以上とする。</p>

項 目	作 業 内 容
	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <p style="text-align: center;">写真2 敷きワラをしたキュウリ（左）とマルチをしたままのキュウリ（右）</p> <p>ウ キュウリのウイルス病対策</p> <p>黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は平年並であり、5月下旬から6月上旬の降雨により、それ以降は減少しているが、生育初期にウイルス病に感染すると被害が甚大となる可能性が高く、定植時の粒剤施用や圃場周辺の雑草防除等の徹底は行うようにする（病害虫防除所ホームページの調査データを参照）。</p> <p>また、今後定植するキュウリを早い作型のキュウリの近くに植えると、アブラムシ類やスリップス類、コナジラミ類などウイルス伝搬性害虫の被害を受けやすいため、なるべく離れた圃場を選定する。</p> <p>エ 追肥</p> <p>夏秋果菜類では、今後収穫最盛期を迎えるため、肥切れさせないよう肥培管理を徹底する。追肥は、7～10日間隔で、1回当たり窒素成分で2～3kg/10aを目安とし、株の状態により時期や量を加減する。粒状肥料の場合、追肥を行っても土壌が乾燥していると肥料が効きにくいので、併せて適切な灌水を行う。</p> <p>オ 摘果</p> <p>草勢の低下が見られる場合は、不良果を中心に摘果や果実の若どりを行い、着果負担を軽減して草勢の早期回復を図る。</p> <p>特にキュウリでは、商品価値の低い曲がり果等を早めに摘果することで茎葉の伸長が良くなり、次の着果促進にもつながるため積極的に実施する。</p> <p>カ 病害虫防除</p> <p>多湿条件により、疫病、灰色かび病、軟腐病、葉かび病等が発生しやすいので、早期防除に努める。また、病葉や老化葉は天気の良い日に適宜防除し、通風や採光を良くする。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) イチゴの炭疽病防除</p>	<p>近年、県下ではイチゴ炭疽病の多発傾向が続いており、圃場によっては育苗床の大半の苗が枯死し、定植用の苗が不足する事例も見られる。今後、育苗床管理を行うにあたり、感染株の早期発見・除去や定期的な薬剤防除を行うなど、以下の点に留意し、炭疽病の発生および蔓延を防ぐ。</p> <p>ア 炭疽病の症状</p> <p>ランナーや葉柄に、両端が明瞭にくぼんだ黒色の斑点が見られる。葉にうすい黒色のシミ状の斑点を生じる（写真3）。この時には、胞子がすでに周囲へ飛び散っており、2次伝染（蔓延 開始）していることを示している。株全体が萎れる。小葉が巻き込むように見えることがある。青枯れ状態になった株のクラウン部を切ると、不整形の褐色になった病斑が見られる。</p>  <p>写真3 炭疽病のシミ斑点</p>  <p>写真4 発病初期（左図：葉、葉柄）と萎凋症状</p> <p>イ 防除対策</p> <p>育苗床をよく観察し、炭疽病の症状の見られる苗は直ちに処分する。処分を惜しんで罹病株をそのまま放置しておくと周囲の株に感染が拡大し、壊滅的な被害を受ける場合がある。多肥や過灌水による過湿を避け、株を健全に保つ。降雨前後を中心に定期的な薬剤散布を行い、発病と蔓延を抑制する。発病前は予防的な薬剤、発生後は治療的な薬剤を主体とし、作用性の異なる剤をローテーションで用いる。炭疽病蔓延抑制効果のある底面給水育苗システムの導入を図る（図1、写真5）</p>

項 目	作 業 内 容
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;">  </div> <div style="width: 45%;">  </div> </div> <p>図1 愛媛県農水研方式底面給水育苗の概要 写真5 愛媛県農水研方式底面給水育苗</p>
<p>(3) イチゴ高設栽培の培地消毒</p>	<p>イチゴの高設栽培では、夏の高温を利用し培地の消毒を行う。栽培終了後、株の地上部を除去し、培地を十分湿らせた後、マルチで培地（ベッド）またはバッグを覆って密閉する（7月後半～8月中旬頃）。</p> <p>温度を確保するため、ハウスを閉め切る方がよいが、高温により機械や配管等が故障・変形する場合がありますので、あらかじめハウス外に持ち出すか、覆いを被せたり、ビニルなどで仕切る等を行う。</p> <div style="text-align: right;">  </div> <p>写真6 高設栽培の太陽熱消毒</p>
<p>(4) 太陽熱利用による土壤消毒法</p>	<p>冬春施設野菜では、栽培終了後に太陽熱消毒を行うことにより、土壤伝染性病害をはじめとして、センチュウ、雑草類の種子も死滅させることができる。太陽熱消毒は、梅雨明け後から8月20日頃の期間に実施する。</p> <p>ア 手順として、有機物（切りワラ、緑肥作物等）を10a当たり1～2t、圃場全体に施用し、石灰窒素を10a当たり100kg、全面施用する。</p> <p>イ 圃場全体を深く耕うんし、畝幅70cm、高さ25cm程度の畝を立てる。</p> <p>ウ 透明な古ビニルで圃場全体の地表面を被覆し、周りを土で抑えて密閉する。</p> <p>エ 畝間に水を引き、畝全体に水分が浸透するよう湛水する。</p> <p>オ ハウス全体をビニルで被覆して密閉し、20～30日間置く。</p> <p>カ 処理後はハウスを開放し、土壤被覆のビニルを取り、土壤を乾燥させる。</p> <p>キ 注意点として、効果を高めるため、処理期間中、土壤が乾燥した</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>ら湛水を追加する。</p> <p>ク 晴天が続くと、ハウス内は高温や有毒ガスの発生が見られるため、ハウス内へは立ち入らない。</p> <p>ケ 病原菌の殺菌温度は40℃、6日間以上必要とするため、天候が不順な場合は、消毒期間を延長する。</p> <p>コ 有機物等の施用ムラや耕うんムラ、地表面およびハウスの密閉不足等は消毒ムラの原因となり、その部分が病害の発生源となるので注意する。</p> <p>サ (3)の太陽熱利用による土壌消毒法と同様、ハウス内の機械や配管等の故障、変形等に注意する。</p>